ケア分担する社会に

評論家、NPO理事長 **樋口 恵子さん**

高齢社会の問題に取り組む評論家で、NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長の樋口恵子さんに、2014年の社会の在り方について話を聞いた。

×　×

介護に子育てなど、今を生きる私たちが生活を考えるとき、「ケア」は不可欠な要素になりました。男性は仕事一辺倒、女性は家事一辺倒の傾向が強かった時代がありましたが、近頃は育児をする男性が「イクメン」と人気を集め、高齢者のボランティア活動が多彩に、盛んになるなど、老若男女の日々の暮らしでケアへの関心、比重が高まっています。

仕事（ワーク）と私生活（ライフ）の適切な時間配分を考える「ワーク・ライフ・バランス」の議論が盛り上がっていますが、そこにケアの視点を入れてはどうでしょう。私はそれを「ワーク・ライフ・アンド・ケア・バランス」と呼んでいます。ケアには介護はもちろん保育、教育、ボランティア活動、再就職のために学び直すことも入るでしょう。ケアは、人が自立するための大切な手段です。

ひぐち・けいこ　1932年東京都生まれ。東京家政大名誉教授。「高齢社会をよくする女性の会」理事長。著書に「祖母力」「大介護時代を生きる」「人生100年時代への船出」など多数。

ケアは愛情に基づき行います。かつてはケアの労働は、家族の中で嫁、娘といった女性一人に掛かっていました。ケア漬けにして、その人の多面的な生き方、人生を失わせていたところがあります。ケアする人が幸せでないとしたら、ケアされる人は本当に幸せなのでしょうか。

私たちはみんなでケアを分担すべきです。ケアをシェアし合い、互いに助け合う。それが「共助」です。ケアを強制的な労働としてでなく、自発的な社会参加と考えて進んで実践する人が増えているでしょ。東日本大震災を経て日本人は絆、共助の大切さを知り、ケアをシェアできる社会的準備が整ったのだと思います。

ケアをする人、される人は〝強い人間〟ではないかもしれません。でも、互いに無関心な強い人間の社会と、弱い人々が互いに気を付け合って時にケアし、時にケアされる社会と、どちらが本当に強い社会なのでしょうか。脆弱（ぜいじゃく）性を持ちながら互いに認め尊重し合える、よりつながりの強い2014年の社会づくりに大いに希望を持とうではありませんか。